涼宮ハルヒの感慨

深鏡椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涼宮ハルヒの感慨

【Ｎコード】
Ｎ１４３０Ｇ

【作者名】
深鏡椋

【あらすじ】
ループする夏休みを終えたキョンは鶴屋さんに誘われ映画を見に行くことになったのだが…。

（前書き）

短編３部作の第１部です。第２部・古泉一樹の幇助、第３部・鶴屋さんの傷心のほうも呼んでいただけると嬉しいです。

悪夢だ。
なぜ神は、こんな人畜無害な俺にこんな仕打ちをするのだろうか。
それ以前に神を信じているのかといえば、信じてなどいようはずがない。
まぁ、だからこそこんな仕打ちをされていると言われれば、俺に反論の余地などないのだが。
さて、なぜ俺がこんなに悲観じみてるのか。
まず、現状を説明するとしよう。
暗闇が支配するだだっぴろい部屋に、前方には唯一の光源といえる巨大スクリーン。
察しがよかろうと悪かろうとわかってもらえるだろうが、ここは映画館。
そして、なぜか俺のとなりには、よりにもよって。

涼宮ハルヒがいた。

映画館の前でコイツの姿を見るまでは、俺は鶴屋さんと映画を見ると思っていた。
だってそうだろ？
「キョンくん、映画のチケットを2枚もらったから、1枚あげるにょろ。明日、映画館の前で13時に待ち合わせ～」
と、半ば強引に鶴屋さんにチケットを握らされたのだ。
相手は鶴屋さんだって思うだろ？
実際に映画館の前で待っていたのは、ハルヒだった。
まだ残暑厳しい9月。
朝比奈さんが着そうな白いワンピースを着たハルヒが不機嫌そう

に映画館の前で仁王立ちしていたのだ。
俺の姿を見つけたハルヒは、そのまま強引に俺の手首を掴み映画館の中へと引きずり込まれた。
男のくせに女の子に引きずり込まれたのかとお思いだろうが、実際ハルヒに引きずられてみるがいい。
コイツは運動神経抜群な上、精神的にも圧迫感を与えるのだ。
結果、現在に至るわけだが。
映画もクライマックスが近いようだ。
暇を持て余すようにジュースに刺さったストローに口をつけると「ズズズッ」という音がジュースの変わりに口の中に広がる。
「ん」
スクリーンから視線をそらさず、自分のジュースを差し出すハルヒ。
特に断る理由もないので、ハルヒのジュースを頂戴させていただくことにした。
ストローに口をつけた瞬間、ハルヒに見られたような気がしたが。

まぁ、気のせいだろう。
ハルヒのジュースを飲み干すころには、映画はスタッフロールが流れ始めた。
「いくわよ、キョン」
またしても、手首を掴まれ引きずられていく俺は男としてのプライドなど些細な問題のように思えるのは、不思議だ。
そんなわけがない。
男のプライドをかなぐり捨てた記憶など俺にはない。
「まったく、あの主人公は、もっと下僕を使役すべきよ」
ハルヒが興奮気味に話しているのは映画の内容だろう。
吸血鬼の少女である主人公は血のにおいに敏感で、よく殺人現場に遭遇する。吸血鬼の少女に血を吸われた結果、彼女の下僕になった青年は、吸血鬼の少女のわがままに振り回されつつも、事件解明

のために奔走する。
青年が苦労して真犯人を特定する前に、吸血鬼の少女が真犯人を警察に突き出しているというコメディータッチの映画だ。
ＴＶで２期放送された人気作品だが、あいにく俺は余り好みではない。
現実で我侭娘に振り回されている俺が、どうしてＴＶの中でまで我侭娘に振り回されるストーリーを見なければならないのだ。
青年の姿と俺の姿がダブって悲壮感すら漂う。
そして、よりにもよってこの娘は、さらに青年を使えという。
そのセリフに戦慄を覚えるのは、俺がハルヒの下僕であることを心のどこかで認めているがゆえなのだろうか。
いや、そんなことはない。
そんなことはないと、信じたい。

紅茶とケーキの美味しい店だと鶴屋さんに聞いた喫茶店にて、ハルヒは「下僕の有意義な使い方」についてシフォンケーキを頬張りながら俺に語る。
ハルヒはアルーシャ葉のストレートティーにシフォンケーキ、俺はダージリンのミルクティーに甘さより苦味の強いチョコレートケーキ。
鶴屋さんが勧めるだけあって、どちらも美味い。
ハルヒは散々俺にとって耳の痛い話をすると、俺の皿に残っていたチョコレートケーキを口に含み、「でるわよ、キョン」と、レシートを持ってさっさと一人でレジに向かった。
「おい、ハルヒ？」
「ここは私が払うから。そのかわりキョンは私を退屈しない場所に連れて行きなさい」
この娘はまた無理難題をいう。
時刻はもうすぐ夕方になるころだ。
仕方ない、あそこに連れて行こう。

学校へと続く坂を途中で左に折れる。
そこは西向きに広がった草原の丘のようになっている。
ここは、なかなかの景観で穴場。
「キョン、まさかここが退屈しない場所なんじゃないでしょうねぇ？」
「そのまさかだ」
眼下に広がる町並みに、鼓膜を震わせる風の音、木々の葉が摩擦する音、鳥の囀りという自然界のオーケストラが堪能できる。
「ハルヒ、目瞑ってみろよ」
そのオーケストラに集中できるよう、視界を閉ざすようにいうとハルヒは「なにするきよ」と悪態をつきながらも素直にそれに従う。
「なかなかいい音楽だろ？緑の匂いに自然の音。なかなかに穴場だろ？」
「キョンが、こんなロマンチストだとは思わなかったわ」
すまん、この場所を俺に教えたのは古泉だ。
真実は俺の胸の中にしまっておこう。
ハルヒの瞼がわずかに振動する。
「まて、まだ目を開けるな」
俺は目の前に来る西の空に視線を送る。
先ほどまで青空が広がっていた。
「ハルヒ、目をあけてみろよ」
「あ……」
ハルヒが思わず感嘆の声を上げた。
それもそのはず、先ほどまで青かった空は青とオレンジのグラデーションに染め上げられていたのだから。
夕焼けになる一歩手前。
そして、ゆっくりとさらにオレンジに染まっていく青空。
「どうだ？」

「……キョンのくせに」
「自然もいいものだろ？こんな不思議な情景が毎日見れたんだ」
これによって身近にある不思議に気づいて、ハルヒの中の「不思議」のハードルを下げてもらいたいものだ。
俺は、一生懸命夕焼けを見つめるハルヒの姿に満足していた。
しかし、次の瞬間、俺はハルヒに自然のよさを教えたことを後悔した。
「キョン、来週ＳＯＳ団でキャンプするわよ！忙しくなってきたわ！！」
水を得た魚。
こうしてはいられないと夕日に背を向け、走り出そうとするハルヒが肩越しに俺へと振り返る。
「今日は楽しかったわ。あんたとならまた……してあげても良いわ」
一部声が小さくて聞こえなかったが、その顔は夕日に照らされてか、赤く染まっていた。
いや、その姿に一瞬「かわいい」だなんて思ってないぞ。
あぁ、断じて思っていない。
走り去るハルヒの後姿を見送り、長いようで短い「デート」は幕を閉じたのだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1430g/

涼宮ハルヒの感慨

2010年10月8日15時28分発行